

社会福祉研究・教育における多文化共生—コロナ禍における留学生の経験と教育・支援の現場から—

発題者

坂本いづみ（カナダ・トロント大学ソーシャルワーク学部 准教授）

市川ヴィヴェカ（カナダ・トロント大学ソーシャルワーク学部 博士課程学生）

**『留学生の教育と支援 ～反抑圧的な社会福祉教育(anti-oppressive social work education)に向けて』  
坂本いづみ**

北米では、今や留学生は大学に必要不可欠な存在です。カナダでは、2011年から2021年の10年で、留学生の数は2.5倍以上に増加しました。「大学の国際化」、というのは多くの大学が掲げている目標で、留学生の受け入れはその主な手段の一つです。大学の入学案内などには、その大学が何カ国からの留学生を受け入れている、などとの表記がよくあり、その数が多いことが大学の評判にも影響するとも言えます。留学生が大学にとって必要不可欠なもう一つの理由は、留学生が持ってくる授業料です。アメリカでも、カナダでも、外国人留学生が支払う授業料は、国全体の大きな歳入の一つになっています。実は、留学生の授業料や各種納付金は近年上昇を続け、現在ではカナダ市民や永住権保持者の学生の授業料の5倍にも当たる授業料を払わなくてはならない大学もあります。留学生が直接（授業料など）または間接的（食料、住居など）にカナダで支払う額は、国全体の経済に日本円で2兆円以上の貢献をしていることとなります。こうして、経済的、学問的な利益をもたらしてくれる留学生ですが、大学や国全体から、その貢献に見合うだけの留学生への配慮や支援がなされているかという点、そうとはなかなか言えません。

私の在籍するトロント大学でも、コロナ禍の中、対面授業からオンライン授業に切り替わった時、一番影響を受けたのは留学生ではないかと思います。例えば、自分の家庭内だけで「バブル」を作り、他の人と交流しないようにと、州政府の通達が出ている時期など、アルバイトができず経済的に困窮したり、友人に会えず孤立しがちな留学生も多かったと思います。休み中に自国に帰りたくても、飛行機が飛んでいず、カナダに居ざるを得ないという状況もありました。また、カナダに来る前の留学生は自国に止まり、オンラインで授業を取っていて、友人を作ったり、大学のアメニティを利用したりする機会が全くなくても、授業費の額は変わらず、不公平だという声が上がっていました。今、特にコロナ禍から抜け出しきれていない中、留学生の教育と支援を、社会福祉教育の中でどう考えていけば良いのでしょうか？

私は、日本で社会福祉教育を受けた後、アメリカでは留学生として、カナダでは外国人の教員として社会福祉教育に関わってきました。この発表では、30年近くに及ぶ北米での経験から、社会福祉教育における留学生の教育と支援についてお話しします。アメリカでは、初めに修士課程を終えてから、博士課程に進みました。社会福祉教育を受ける中で、留学生のユニークな経験や国際的視点が考慮されていないことに不満を持ち、色々な活動に関わっていきました。例えば、他の留学生仲間とアジア系留学生グループを作り、留学生の経験や国際福祉をテーマにしたセミナーを主催したり、不満を持っている事項について学部に質問や要求書を提出したりしました。また、外国で働いた経験や国際福祉に興味のあるアメリカ人学生と留学生が一緒になり、**Social Work International**（ソーシャルワーク・インターナショナル）というグループを発足し、国際福祉の会議を主催したりもしました。国際福祉の授業を作って欲しいという要求を学部会議に提出し、そのカリキュラム作りにも関わりました。また、留学生や外国人の客員研究員の帯同家族が孤立しがちにも関わらず、学生ではないため大学の支援対象にはならず、地域に入っていくのも難しいという現状を踏まえ、大学の教員や職員を巻き込んで、外国人家族を支援するコミュニティプログラムを立ち上げました。また、カナダで教員になってからは、学部内で初めての、留学生アドバイザーとなり、留学生のサポートをすると同時に、教員に対しても留学生を教育、支援するとはどういうことか考えてもらうための情報セッションを持ったり、特化したトピックで資料を作り配布したりしました。

幸運なことに、私は北米では、留学生だからといって、忖度をして大人しくしていなければいけない、という社会的メッセージは受け取りませんでした。当然のことながら、一人で何かを変えることは、多くの人と変えることよりずっと難しいです。でも、現状を改善する活動を自分で手を挙げてやろうとすると、支援してくれる人が必ず見つかりました。留学生として大変なことがたくさんあっても、仲間と一緒にオーガナイズをしたり、活動していくことで変化が可能だと思わせる社会で、私はアドボカシーの手法をたくさん学び、それが、私の社会福祉・ソーシャルワークの理解を深めてくれました。

この発表のタイトルに、「反抑圧的な社会福祉教育(anti-oppressive social work education)に向けて」と書きました。私は社会福祉教育も、教員やスタッフが教育や支援を通じて学生の自己実現や目標達成を支える、広義の社会福祉実践だと考えます。ですので、留学生の支援と教育にも、反抑圧的実践=anti-oppressive practice (AOP)の理念や実践を活かそうと取り組んでいます。AOPとは、イギリスで1980年代に始まったソーシャルワークの理論と実践で、人々の「生きにくさ」は、多くの場合、構造的な力の不均衡に端を発すると考えます。そして、AOPでは、そういった生きにくさを、構造的に、また、構造的な視点を持ちつつ、ミクロのレベルで是正していくことを目指します。究極的には、AOPは、社会のすべての人たちが基本的人権を守られ、幸福・平和に生きられる社会を保証するために行われます。それは、留学生に文化適応を求めるだけでなく、構造的、实际的に大学や学部も変わっていくことを意味します。（AOPについて詳しくは、坂本・茨城・竹端・二木・市川（2020）『「脱」いい子のソーシャルワーク：反抑圧的な実践と理論、現代書館』を参照してください。）

当日の発表では、AOPの研究と実践の視点から、留学生の教育と支援についてカナダでの事例を交えながら、お話しさせていただきます。

## 『留学生のウェルビーイング～元留学生・現カウンセラーの観点から』

市川ヴィヴェカ

長引くコロナは、国境、人種、年齢や性別を超えて多くの人の人生に多大な影響を与えました。治まることのない不安、癒えることのない喪失、やり場のない怒りを抱えながら私たちは今日も生活を続けています。皆がしんどい状況の中でも、社会的な脆弱性（生きづらさや弱い立場）を抱える人ほど、コロナによる健康被害、加えてより深刻となった社会の様々な不平等の影響をより強く受けていることは明らかです。様々な国で留学生は授業料、雇用、そしてその他の恩恵を受入国にもたらす存在として歓迎されています。しかし、留学という挑戦は、孤立、言葉の壁、文化の違い、在留資格、経済的負担などの様々なリスク要因も内包しています。この発表ではカナダの大学と大学院に留学経験があり、現在カナダでカウンセラーとして留学生のメンタルヘルス支援にあたってきた経験から、「留学生」とひとくくりにはされたカテゴリーでは見過ごされがちな一人ひとりの**留学生が抱える困難の複雑性、留学生のウェルビーイング**に関して、社会正義に基づく留学生支援の一環として検討します。

コロナ以前から欧米では、留学生の自殺が深刻な問題として社会の注目を集めるようになってきました。質の高い教育を期待し、高い学費と生活費を負担して多くの留学生は母国を離れ、家族や友人と離れ、異文化の中で現地学生と同じように勉強や研究に取り組んでいます。中には生活費や学費をアルバイトで負担する留学生もいます。このようなストレスフルな環境が留学生の**ウェルビーイング**を阻害する傾向があるのは明らかでしたが、コロナ禍、その困難はより一層深まりました。カナダ（そして多くの国）では、留学生は保険適応されるヘルスサービスや利用できる様々な社会福祉制度が現地学生より、限られています。その不平等さは、緊急事態宣言やロックダウン化においてより顕著に現れました（家賃助成や無料カウンセリングサービス利用など）。

「留学生」と多種多様な人々から構成される外国にルーツを持つ人たちが必要とする支援を理解することは、より人道的な、社会正義に基づく留学制度へと続く道となり得ます。困難が増えた一方、コロナ禍、留学生同士間・留学生と現地学生・留学生とその他のマイノリティコミュニティとの連帯が強まりました。多様な人材が日本、そして世界のソーシャルワークをより強くしてくれる——今の留学生を支えることは未来のソーシャルワークをそだて、ささえ、つなげる人材を育てることなのです。